

# 野良猫は愛に溺れる

*Tamaki & Yousuke*

---

桜 朱理

*Syuri Sakura*



エタニティ文庫

## もくじ

野良猫は愛に溺れる 5

Say you love me 285

幸福でわがままな野良猫 309

書き下ろし番外編

野良猫の居場所 323

野良猫は愛に溺れる

## 1 野良猫は夜に囚われて

「環。お前、俺の愛人になれ」

三年ぶりの再会だというのに、かつての飼い主はざらりとそんな不埒な命令を下してきた。

相も変わらず人を振り回す男に、ひどく心を乱される。

——本気か、冗談か……

真意の読めない男の眼差しに、環は自分が再び恋に落ちたことに気が付いた——

三連休目の金曜日。どこか浮かれた空気を醸し出した同僚たちが、定時になると次々と退社していく。そんな中、水森環は押しつけられた大量の領収書と格闘していた。「一体、いつからため込んだのよ！あの課長は!! さっさと渡してくれてたらこんな面倒なことにならなかったのに!!」

残業の原因になっている上司の姿を思い浮かべながら、環は未処理の領収書の束を睨みつけて愚痴を零す。

その上司は「三連休は家族と旅行に行くから、水森さん、これ頼むよ!」と満面の笑みと気軽な一言だけを残して、定時にさっさと帰っていた。

ここ三か月、課長は新規プロジェクトの立ち上げのために、帰宅が連日午前様の忙しさだった。五歳になる愛娘に「おじさん誰?」と真顔で言われた衝撃に、真つ青になってしおれていた課長。ようやく仕事が山を抜け、久しぶりに愛娘と出かけられると今日の課長は浮かれていた。その満面の笑みを見れば、環はこの残業を仕方ないと受け入れるしかなかった。

連休前の金曜日だというのに、一緒に過ごす相手もない気楽な独り身だ。

まあいいかと引き受けたのだが、いつからため込んでいたのかわからない未処理の領収書の山は、かなり厄介な代物だった。

「どうでもいいけど、これ今さら経理に出して通るの? 通らなくても私は知らないぞー」

ブツブツと独り言を零しながらも、環の手は正確に領収書の数字をフォーマットに打ち込んでいく。

最低二か月分はある領収書に頭痛を覚えるが、課長のここしばらくの忙しさも知って

いる。できるだけ経理に文句を言われぬように完璧に処理をしていく。  
水森環。鷹藤総合商事という日本でも有数の商社で、営業事務を担当している。ミ  
スをするともなくなってきた。ようやく仕事が楽しくなってきた社会人三年目の  
二十五歳。

胸のあたりまで伸ばした髪はゆるふわパーマ。そして人には気が強いと思われがちな  
くつきりとした猫目特徴的だ。かつて付き合っていた男には、よく野良猫にたとえら  
れていた。特別美人でもないけれど、不美人でもない。どこにでもいるごくふつうの  
O。それが環だ。

ようやく領収書の山が減り、もう終わると環が一息つくようと思ったとき——その電話  
はかかってきた。

時刻はもうすぐ八時。同僚たちは残っておらず、営業部の広いフロアには環一人しか  
いない。

スマートフォンの軽やかな電子音が静かなフロアにやけに大きく響いた気がして、環  
は慌てて電話を取った。

「はい。水森です」

金曜日のこの時間。電話をかけてくるのは大学時代の悪友の石岡莉乃くらいだけど、  
相手は彼女ではない。見慣れない電話番号に首を傾げつつ、環は電話に出た。

『環か？』

「……え？」

その艶やかな男の声を聞いた瞬間、環は驚きのあまり言葉を失った。  
全身の皮膚がざわめく。そんな感覚を覚えて、環は顔を強く閉じた。

——嘘。どうして……

たった一言の呼びかけで相手がわかるほど耳に馴染んだその声は、今現在、イギリス  
に赴任しているはずの男のもの。もう三年も耳にしていなかった。

一瞬、これは残業に疲れた自分が見ている夢かと思った。だがそんなはずはない。

環の背後から誰かが廊下を歩く靴音が聞こえてきて、これが現実なのだと教えてく  
れる。

——こんな時間に誰？

連休前の今日、残っている人間なんて環くらいのものだ。警備の人間が巡回にでもき  
たのか。

そんな全く関係ないことを考えて、環は少しでもこの動揺を抑え込もうと努力する。  
でも、それが無意味な行動なのだを知っていた。

異常に速くなった鼓動を鎮めたくて、環は顔を強く、強く閉じる。

この男の声を聞いただけでこんなにも動揺する自分が、信じられない。

『環？ どうした？』

何も言葉が発せない環の動揺を面白がるような声が、耳朶を打つ。

——この性悪飼い主!!

人の動揺を面白がる男の端正な顔を思い出して、環は心の中で悪態をつく。

通話を終了させたい衝動に襲われながらも、自分がこの電話を切れないことを環は知っていた。

「……陽介？」

確認するために呼びかけた声は、ほとんど音にならずに喉に絡みついて、掠れていた。そんな自分が嫌になる。

「久しぶりだな」

気付けば、先ほどまで聞こえていた靴音がやんでいた。

「こんな時間まで一人残って仕事なんて、誰かのを押しつけられたか？ 相変わらずお人よしだな。うちの野良猫は」

からかう声はスマートフォン越しではなく、背後からはっきり聞こえてきて——。環は一瞬だけ天井を見上げて、小さく息を吐き出した。

そうして、まだ繋がったままの通話を切って、後ろを振り返る。

「よう。野良猫」

まるで離れていた三年間なんてなかったように片手を上げて微笑む男に、環はなんだかひどく泣きたくなった。

あの頃よりも深い色を宿す男の瞳と視線が絡んだ瞬間に、三年前に止めたはずの時間が、一瞬で動き出したような気がした。

「誰が、野良猫よ。いい加減、その呼び方、やめて……」

強がって返した言葉は、震えても掠れてもいなかった。そのことにホッとす。

「こんなところで何してるのよ？」

なんでもない顔で訊ねるが、心はひどく乱れていた。心臓が破裂しそうだ。

——いつ日本に帰ってきたの？ 帰ってくるなんて聞いてない。

聞きたいことも、言いたいこともたくさんある。しかし、たくさんありすぎて、上手く言葉にすることができない。

覚悟もないままに不意打ちのように再会した元飼い主に、環は動揺を隠すのに必死だった。

「久しぶりに会ったっていうのに、随分ご挨拶だな」

「ちよ！ やめてよ！ 髪がぐちゃぐちゃになる!!」

なんでもない顔で近寄ってきた男——鷹藤陽介が、くしゃりと環の前髪を乱してくる。抗議の声を上げて、環はその大きな手から逃げた。

乱れた前髪に腹を立てながら手櫛で直して、鷹藤を睨みつける。毛を逆立てた猫のように怒る環を見下ろした男は、どこか懐かしげに笑った。男の手のひらの感触に、この再会が夢でもなんでもないのである。環は知る。男の端正な顔に浮かぶ相変わらず読めない笑みと、軽い口調。付き合っていた当時と何も変わっていない気がした。

——鷹藤陽介。彼はその名字が示す通り、環が勤める鷹藤総合商事の関係者だ。親会社である鷹藤グローバルカンパニーの現社長の息子で、後継者。今はグループの基幹企業の一つである鷹藤建設で働いている。そこで彼は、主に海外の都市開発を手掛けているはずだ。

整った顔ではあるが、爽やかさとは無縁な男。なんとというか、女好きのする色気のある容貌とでも言えはいいのか。少し長めの黒髪と浅黒い肌。目鼻立ちのくっきりとした派手な顔立ちには、野性的で男臭い。そして何よりこの男を印象付けるのは、その真っ黒い瞳だ。まるで夜の闇のような静かな深い色を宿していて、目が離せなくなる色気がある。

鷹藤は環の大学時代の先輩で、三歳年上の元恋人——と言っているのか。どちらかというところ、元飼主。そう表現したほうが、しっくりくる。そんな関係だった。

環は十八のとき、両親を事故で一度に亡くした。そして、唯一の親戚だった叔父夫婦

に、両親が残してくれた遺産を食いつぶされた。

無一文の環を、『お前、面白いな』——そんな一言で拾ってくれたのが、鷹藤だ。彼は、大学の学費を含めたすべての面倒を見てくれた。

彼の住んでいたマンションで一緒に暮らした日々。その頃から、時々鷹藤はふざけたように環を『うちの野良猫』と呼んでいた。

そう呼ばれるたび、自分は彼の恋人にはなりきれないのだと寂しさが募った。そんな余計なことまで思い出して、環は鷹藤から視線を逸らす。

そして鷹藤に気付かれないようにそっと息を吐き出して、乱れた心を立て直した。

「いつ日本に？ 帰国はまだ先のはずでしょ？」

——たかが元カレに遭遇したくらいで、自分はなんでここまで動揺しているのだらう？

そう思うものの、再会があまりに不意打ちだったせいで、環の心はどうにもかき乱されていた。

三年前の別れなどなかったように鷹藤が環を構ってくるから、自分だけが動揺している気がして落ち着かない。

「ちよっと野暮用で呼び戻された」

「ふーん。そう。で？　こんなところで何してるわけ？」  
野暮用と言ったときに、一瞬だけ鷹藤が目を眇めた。その野暮用とやらが、彼にとつてはあまり面白くないものなのだどと気付く。

目を眇めるのは、鷹藤が機嫌がよくないときのサインだ。  
自分の機嫌が悪いからといって人に八つあたりをする男ではない。だが、人をからかってストレスを発散するような性格の悪さはあるから、こんな目をするときは要注意だ。

今さら、鷹藤のストレス発散のために振り回されるのは、真つ平ごめんだ。

だから、環はあえて素っ気なくもう一度、なんでこんなところに現れたのか鷹藤に問うた。

鷹藤が、にやりと笑う。

その微笑みに、環は背筋がうすら寒くなるのを感じた。

「日本に戻ってくるのも三年ぶりだしな。ちよつと懐かしくなつてふらふらしてた。ついでにうちの野良猫がまだ仕事してるみたいだったから覗きに来た」

鷹藤の言葉に、環の眉間に皺が寄る。

——どうして、今日残業しているのを、この男が知っているの？　今日の残業は急遽決まったのに。誰だ？　陽介に、私がここにいるなんて言った奴は！！

共通の知人や友人の顔を思い浮かべて、すぐに思い出す。今日、環が残業する原因になった上司は、鷹藤の親戚筋にあたる男で、昔から彼のことを可愛がっていたことを。情報源は間違いなくその上司だ。

環はもうすぐ処理の終わる領収書の山に視線を投げて、うきうきで帰っていった課長の顔を思い浮かべる。

——せつかく整理したけどこれ、どうしてくれよう。いつそ破棄しちゃおう？　なんて真つ黒いことを考えるが、それができないのは自分が一番わかっている。

「そう。御覧の通り私はまだ仕事が残ってるから、顔見て気が済んだなら、さっさと心おきなく久しぶりの日本を堪能してきて？　会えてうれしかったわ」  
にっこり笑って一息にそれだけ言うと、環は鷹藤に背を向けて座り直す。

そうして、見せつけるように未処理の領収書に手を伸ばした。

こんな目をしているときの鷹藤には聞わらないのが一番だ。環は仕事を理由に、早々に鷹藤を追い出すつもりだった。

「春樹の奴は随分、未処理の領収書のため込んでたみたいだな。これ、今さら落ちるか？」

環の思いなど知らぬ様子で、鷹藤が横からパソコンを覗き込む。そして勝手に、環が処理していた書類の中身を確認していった。



「……さあ？」

環自身もそれは疑問に思っていただけに心配になるが、今考えたところで仕方ない。あとは課長が自己責任でなんとかするだろう。

「というか、邪魔!!」

背中を感じるぬくもりに、ようやく落ち着きかけていた鼓動が再び乱れる。

一歩間違うと吐息の触れる距離まで近づいていた端正な顔に、頬が熱くなるのを感じた。

動揺を悟られたくなくて、環は邪険に鷹藤の顔を手で押しやる。

「久しぶりに会ったっていうのに、扱いが邪険だな、野良猫!」

「人の仕事の邪魔するからでしょ?」

環に押しやられた頬を押しえながら身体を起こした鷹藤は、怒る環を眺めて何故かひどく楽し気な笑い声を響かせる。

あの頃と何も変わらない屈託のない笑いに、やはりこの再会に自分だけが心を揺らしているのだと環は実感していた。

そうして、思い出す。昔から鷹藤はこういう男だったと。

飄々としていて掴みどころがない。

日本でも有数の企業グループの跡取りで、生まれながらにすべてを手に入れていたこ

の男は、おおよそ執着とは無縁の性格をしている。

金にも地位にも名誉にも執着せず、時に人間関係すらもあっさり切り捨てるこの男にとつて、三年前の二人の別れも、特別わかまりを残すものではなかったのだろう。

潔いよすがのを通り越して、いっそ薄情にも思えるこの男の態度に、環だけがいつも振り回される。

別れを決めた原因は色々であるが、一番はこの男の読めない本音にあった。

本音が掴み切れずに、いつか自分もあっざり切り捨てられるのかと不安におびえた日々。好きでいることに疲れ、環はこの男との別れを決めた。

そうして――

『孤児は息子の傍にはいらなんだよ』

冷酷な眼差しで告げられた言葉。

いまだに環の心の柔らかい部分に刺さって抜けない言葉が、不意によみがえる。

――本当にやめよう。余計なことまでどんどん思い出す。

先ほどから呼び起こされる鷹藤との過去は、ろくでもないことばかりだ。自分一人が過去に拘こだって動揺しているのが、なんだか馬鹿らしくなってきた。

「もう本当に仕事を片付けちゃうから邪魔しないで」

環はパソコンの画面を眺めたまま、本格的に仕事を再開する。気が済んだら鷹藤は勝

手に帰るだろう。

「手伝ってやるうか？」

「結構です！ もうすぐ終わるもの」

「ふーん。なら待つ。飲みに行くぞ」

「はあ？」

環は、思わずパソコンから鷹藤に視線を戻す。

「その量ならあと三十分くらいか？ 待ってる」

「いやいや、ちよつと待て。なんでそうなるのよ？」

「せっかく久しぶりに会ったんだ。付き合え」

問答無用な命令に、環はため息をつく。

「わかった」

こういう言い方をするときは、もう鷹藤の中でそれは決定事項で、譲らないことを知っている。逆らうだけ無駄だ。

「最低で、あと三十分よ？ それでもいいの？ 時間、大丈夫なの？」

「それくらいなら別に待てるし、今夜の予定は特にならない」

「そう。でも、後ろで待たれたら集中できないから、どこかで待ち合わせにして」

「ん。じゃあ、珈琲でも買ってくる。環も飲むだろう？」

「お願い」

「了解」

軽い返事とともに鷹藤は環の頭にボンと軽く手を置いて、踵かかとを返した。

歩き去るその大きな背中を見送って、環は今日何度目かわからないため息をつく。

——今さら、一体どんな顔で一緒に酒を飲めばいいのよ。

そう思うが、あの自由奔放な元飼ほんほうい主は、そんなことは気にもしないだろう。

考えてみれば、どうせ鷹藤は、野暮用やまようとやらが終われば赴任地きんちのイギリスに戻るのだ。

今晚一晩やり過ぎせば、また数年会うことはなくなるはず。

そう自分に言い聞かせる。そうして環は、仕事を終わらせるために猛烈な勢いでキーボードを叩いて、残っていた領収書の整理を開始した。

このときの環はまだ知らなかった。

三年ぶりの再会が、この先の環の人生に大きな波乱をもたらすことを——

環がなんとか処理を終えて最終チェックをしていると、「環、珈琲コーヒー」という声があった。そして会社の近所にある珈琲ショップの紙コップが、作業の邪魔にならない位置に置かれる。

「ありがとう。これ確認したら終わりだからもう少し待って」

鷹藤を振り返ることもなく、書類に目を落としながら環がそう言う。「わかった」と答えが返る。

鷹藤は、環の傍の椅子に座って、珈琲を飲みだした。それを横目に、環は仕事を進める。

少し作業をした後、一息つきたくて環も珈琲に手を伸ばす。

カップに口をつけると、少し猫舌気味の環が丁度よく飲める熱さになっていた。

口の中に広がるキャラメルマキアートの味に癒やされる。

空腹に適度な糖分が補給されて、環は自分がかかなり疲れていたことに気付いた。

環が疲れると甘いものをほしがるのを、この男はよく知っている。彼の気遣いに、何故かほのかな痛みと切なさを覚え、環は珈琲と一緒にそれを飲み込んで立ち上がった。

課長のデスクに、処理した領収書と書類を置く。そして、環の仕事の終わりを大人しく待っていた鷹藤を振り返った。

「お待たせ。終わったよ」

「じゃあ、行くか。何か食べたいものあるか？」

「任せる」

「わかった」

環が自分のデスクに戻り鞆を取り出すのを待って、二人は連れ立って外に出た。

## ☆

環が連れてこられたのは、鷹藤の今夜の宿だというホテルの上階にあるレストランだった。

三連休直前の金曜日の夜。夜景や料理の味が評判で、ネットで今注目のデートスポットになっているレストランだ。いくらディナーには遅い時間であっても、夜景が一際綺麗に見える個室を押さえられるなんて、本当にこの男と自分は住む世界が違う。

実家の影響力だけでも計り知れないというのに、この男は、自分の力だけで人が羨むものすべてを手に入れてる。学生時代から、小遣い稼ぎと称して株式投資やベンチャー企業の上り上げなど様々なことを行い、財を成したのだ。何かに夢中になるとすさまじい熱意を注ぐ一方で、あっさりそこから手を引いたりもする。何ものにも一切の執着を見せないのだから、本当に掴みどころのない男だと環は思う。

この執着のなさが育ちのよさなのかもしれないが、やはり環には理解できそうになかった。

食事中は互いの近況や共通の友人たちのことなど他愛ない話だけで、穏やかに時間は過ぎていった。

機嫌が悪いのかと思っていたが、鷹藤は特に環をからかかって遊ぶことはなかった。だから環は、久しぶりの鷹藤との時間を純粹に楽しむことができた。

うまい料理に酒と夜景。二人の間に流れるのはひどく穏やかな時間で、気付けば再会から感じていた緊張も困惑も消えていた。

だから、油断していたのだ。

この元飼い主が、優しいだけの男のわけがなかったのに――

食事が終わり、レストランから最上階にあるバーラウンジに移ったときだった。

その壁は全面ガラス張りで、客たちが純粹に酒と夜景を楽しめるように設計されていた。ぼつりぼつりと灯された間接照明が席を淡く照らし、まるで自分たちが宙に浮いているような不思議な心地になる。

窓際に案内され、二人並んで夜景の見える席に着く。

鷹藤はギムレット、環はブルームーンを頼む。

カクテルが届けられるまでの間、環は目の前の夜景に見惚れていた。高層ビル群が生み出す星屑は天上の星よりもなお輝いて、人々の視線を奪う。

――瞬く煌めきの一つ一つに、人々の営みや人生がある、なんて思うのは、ロマンチックが過ぎる？

環は、パソコン画面と向き合い続けて疲れた目を癒やすように、遠くに目を向けた。

視線を上げると、空は綺麗な藍色。昇る月は神々しいまでに白く、地上の星屑の海を従えていた。

感嘆のため息が、思わず零れる。

「綺麗ね」

「そうだな。気に入ったか？」

「うん」

穏やかに問われて素直に頷けば、鷹藤がどこか不思議なものを見るような目で、環を見下ろしてきた。

「何？」

その眼差しの意味がわからずに、環は首を傾げる。

「いや、滅多におねだりもしなければ、プレゼントもあまり喜ばなかったのに、こういうのは喜ぶんだなと思って。夜景一つでご機嫌になれるって、やっぱりお前は変わってるよ、野良猫」

鷹藤の言葉に環は顔を顰めそうになる。それを堪えながら、鷹藤から視線をそっと逸らした。

そして、まるで言い訳のように呟く。

「別に喜んでなかったわけじゃないわ。プレゼントは嬉しかったわよ？」

「そうか？」

「そうよ」

「ふーん」

何かを言いたげな眼差しを見せながらも、鷹藤はそれ以上突っ込んでくることはなかった。

それをいいことに環は目の前の夜景を眺める振りをして、昔を思い出す。

好きな男からのプレゼントが嬉しくなかったわけがない。あの当時贈られたものは、今でも大事に使っている。ただ、意味もなく高価なものをプレゼントされるのは苦手だった。

鷹藤が贈ってくるものにはときに高価なブランドものもあって、そういうものをもらうたびに環は、自分たちの住む世界の違いを感じていた。今思えば、随分卑屈ずいぶんになっていたものだ。

でも、あの頃の環は高価な贈り物よりも、鷹藤と一緒に過ごせればそれだけでいいと思っていた。

そんな純情で健気けなげな頃が、環にもあった。

「お待たせしました」

会話が途切れた丁度ちょうどいいタイミングでウェイターから声がかかり、カクテルが置か

れた。

環の視線は夜景から、グラスの中の透明感のある青に引き寄せられる。

「久しぶりの再会に」

鷹藤がカクテルグラスを持ち上げたのに合わせて、環もグラスを持ち上げる。

グラスに口をつけると、フルーティーな甘さが広がった。

喉を滑り落ちていくアルコールがゆっくりと身体を巡り、軽い酩酊感めいていかんを覚える。

環はもともとアルコールには強くない。食事中にワインを飲んでいただけもあり、この数口のカクテルで酔いがまわり始めていた。

だから、その言葉を鷹藤に告げられたとき、環は一瞬それが夢なのかと思った。

グラスを置いたカッソンという音に引き寄せられるように、隣の鷹藤に視線を向けた。

「環。お前、俺の愛人になれ」

三年ぶりの再会だというのに、不意打ちでそんな不埒ふちちな言葉が飛び出してきて、環は呆気にとられる。

——この男、一体、何を言い出した。

束の間の沈黙が、二人の間に落ちる。

「……はあ？」

言葉の意味が頭の中に沁しみると同時に自分の唇から漏れた声は、我ながらひどく間拔

けだと思った。

きつと今浮かべている表情もそうだろう。

何かを聞き間違えたのかと思つて鷹藤の顔を眺めるが、男は涼しい顔で再びグラスを手に取り、傾けている。

ホテルの最上階にあるパーラウンジ。目の前に広がるのは光が煌めく夜景だ。

ふつうの女性だったら夢を見たくなるようなロケーションだが、それらすべてをぶち壊した元飼い主の言葉に、環はどう反応していいのかわからなかった。

男の真意を測りかねて、思わず無駄に端整なその顔を眺める。

——本気なのか……冗談なのか……

この男の場合、どちらの可能性もあることが厄介だった。

だが、いくら眺めてみたところで、鷹藤が何を考えているのか環にはわからない。

人生の行動基準が『面白いか』『面白くないか』。

その二択で生きているような男の考えることなんて、長く一緒に過ごした環でさえ推し量れない。

いや、長く過ごしたからこそ、環にはこの元飼い主のことがわからなくなっていた。

鷹藤が、環に向き合う。

絡む視線に、心の奥がざわつく。

もうとうの昔に忘れたはずの恋心が疼いた気がした。

「愛人に、なれ、つて言った」

環の困惑を見透かしたのか、鷹藤が、今度は一音一音、区切るように告げてきた。

「愛人……」

鷹藤の言葉を無意識になぞる。

言葉は理解できるが、意味がわからない。

ただただ呆気に取られて、環は男の顔を眺める。

だがそこで、こちらを眺める男の切れ長の目に宿る輝きに気付いて、環はひっそりため息をついた。この状況を面白がるような眼差しに、すべてを悟る。

これは命令なのだ。そして環には拒否権はない。

環は無言のまま鷹藤から視線を外して、目の前に広がる美しい夜景を再び眺める。

しかし、美しいはずの夜景も、今の環の中に渦巻く感情を宥めてはくれなかった。

答えを待つ男の視線を横顔に感じたが、環は何も答えずに、目の前のカクテルグラスの縁を指先でつま弾く。

よく冷えたグラスはリイーンと涼やかな音を立てて、二人の間に落ちる沈黙を揺らす。今、言葉にできない感情を、環は持て余していた。

単純な怒りだけではない何かがあるに混じっている気がして、環自身も自分が今、ど

んな感情に支配されているのかわからない。

三年ぶりの再会にただでさえ動揺しているというのに、そこにぶち込まれたさらなる爆弾に頭痛を覚える。

でも、こんなことを環に命じるくらいには何か事情があるのだろう、とも思う。伊達だてに付き合いは長くない。

この男が何を考えているのかさっぱりわからないと思うのに、こんなときばかりは裏に隠された何かに気付いてしまう自分にうんざりする。

どうせ、自分は断らない。この男の言葉を拒めない。

この男は、それすらもわかっていて、環に命じたのだ。

そう思えば腹も立つ。

『お前、面白いな』の一言で、環を人生最大のどん底から救い上げてくれた元飼い主。その彼の言葉を拒めるほどに、環は恩知らずではない。

何も気付かない野良猫のらねこでいらればよかった。

ちらりと横目で鷹藤に視線をやれば、気付いた元飼い主は艶あでやかな笑みを浮かべて環を見つめ返してくる。

答えを促うながしてくる男の眼差しまなざしに、環は苦笑う。

アイジン——愛する人と書いてそう読む言葉は、ひどく不穏だ。

この元飼い主が発しただけに、その言葉は余計に不安を煽あおる。だけど、環は答えていた。

「——愛人って、何すればいいの？」

目の前の男が、満足気に、けれどひどく凶悪な顔で笑った。

自分は何かとんでもない間違いを犯したのではないか——。そう思ったが、放つてしまった言葉は取り返せない。

「愛人って言うのは、いわゆるセックスの相手だな。この場合は俺の」

「ふざけんな」

何もかもすべてをぶち壊すような説明をした男を、環は一言のもとに切つて捨てる。

——何が、俺のセックスの相手だ。女に不自由なんてしてないくせに。この男はそういう意味で、今さら環を必要としないはずだ。揺れ動いていた環の心が、不意に静かになる。

「俺は環のそういうところ好きだよ」

にやりと笑ってそう言う鷹藤を、環は胡乱うろんな眼差しまなざしで睨にらみつけた。

「嬉しくない。で？ 一体、何がどうすれば愛人なんて必要になるのよ？ まだ結婚もしてないくせに」

「そうだな。まあ、ちょっと厄介なことになっている」

「どっかの誰かに結婚でも迫られてるわけ？」

「よくわかったな」

感心したようにこちらを見る男に、わからないわけがあるかと思う。

女好きのする容姿に、大企業の跡取り息子という肩書き。こんな魅力的な条件を揃えている男が、独身なのだ。強引に結婚を迫る女がいてもおかしくない。そもそも、昔からその手のトラブルにつきまとわれている男だった。

本人はその要領のよさをいかになく發揮して、地雷になりそうな女からは上手に逃げていたはずだが。今回は一体何があったんだか。

「わざわざ私に愛人になれなんて言うあたりで、なんかあったと思うのがふつうじゃない？」

今さら復縁を求められるほど、鷹藤が環に執着しているなんてうぬぼれはもっていない。だから、何かの面倒ごとに巻き込まれて、愛人なんてものを必要としていると考えたほうが合理的だし、筋が通る。

「つまらないな」

「……え？」

真面目に話を聞いているつもりでいた環は、返ってきた言葉の意味がわからず、眉間に皺を寄せた。

不意に鷹藤の大きな手が伸びてきて、環の頬に触れた。環の顔の輪郭を確かめるような鷹藤の指先に、首筋がざわつく。

熱情に繋がる感覚に思わず眉を蹙めれば、思わせぶりな眼差で鷹藤が見つめ返してくる。

だが、身体の反応とは裏腹に、環の心は冷めていた。

本気を孕まない男の他愛ないはずらに、心は乱れない。

「昔の野良猫ならもっと動揺してくれただろうに、そう冷静に分析されるとつまらないな」

「こっちは真面目な話だと思ってただけど？　そういう可愛げがほしいなら他をあたって」

甘い仕草で触れてくる男のどうしようもなさには、覚えるのは冷たい怒りだけなのだ。この男はわかっているのか？

いや、きつとわかっている。わかっいて、環を弄んでいる。

人の感情をかき乱す手から逃れるようにぶいっと顔を背けると、鷹藤はあっさりと環から離れていく。

人をからかって遊ぶこの男のこういう態度には、腹立たしさを覚える。

だけど、この男の態度一つにまだに翻弄される自分には、もっと腹が立つ。



環は怒りとともに、残っていたグラスの中身を一気に飲み干した。トントツと軽い音を立てて、乱暴な仕草でグラスを置く。

「人をからかって遊ぶだけなら、今すぐ帰る。何も手伝わないし、協力もしない」  
無表情でそう告げて、環は席を立とうと荷物に手を伸ばす。

「悪かった」

しかし、環が席を立つ前に、鷹藤にしては珍しく素直に謝ってきた。その言葉に、環は席を立つのをやめる。

いつもよりも真面目な顔をする男を、既に許す気になっていることに環は気付いた。

そんな自分の甘さに愛想を尽かす。でも、鷹藤には言葉にできないほどの恩があるのだ。それはこれから先も簡単に返せないほど大きなものだった。

ふざけた態度には腹が立つが、この男が何かトラブルに巻き込まれていて環が力になれるというのなら、いくらでも手を貸す。

——だというのにこの男は!!

矛先を失った怒りを呑み込んで、環は姿勢を正して座りなおすと鷹藤のほうを再び見やった。

「なんで愛人が必要なのかちゃんとはじめから説明して。それで、私力が力になれるなら協力でもなんでもしてあげる。でも、ふざけるなら今すぐに帰る」

「わかった」

こちらに向き合う鷹藤の表情からは、先ほどまでの人からかう様子は消えていた。

どうやら今度こそ、まともに話す気になったらしい。

視線だけで促せば、鷹藤は夜景に目を向けた。

「今回帰国したのは、親父に呼び出されたからだ」

それだけで、なんとなく鷹藤が置かれた状況が透けて見える気がした。

「そう」

軽く返事をしながらも、環はかつて一度だけ話したことのある鷹藤の父親を思い出す。

冷酷な面差しに蔑む瞳で環を睨みつけ、環を『孤児』と切り捨てた男。その冷たさは、そうそう忘れることなどできない。

支配欲と権力志向が強い企業家である父親と、何物にも縛られたくないと思っている息子。彼らは、昔からそりが合わずに対立していた。

「親父から見合いを命じられた。親父が選びに選んだ末の良家のお嬢様だ。向こうもこの縁談には乗り気なせいで、正面から断るのはかなり難しい」

父親が選びに選んだ、と言ったときの鷹藤の表情はひどく皮肉気で、この話を本当に嫌がっていることが伝わってくる。

「ふーん。それで愛人をでっち上げて、不誠実な男を演じるわけ？」

「ああ」

「それ、ふつうに恋人を作るとかじゃダメなの？」  
もつともな疑問をぶつけてみる。縁談を壊すだけであれば、愛人なんかじゃなく、ふつうに恋人を作ればいい話だ。

鷹藤が微笑めば、片手では足りないほどの数の女が簡単に落ちるだろうに。わざわざ環に愛人役を頼む意味がわからない。

「下手な女に恋人役をさせて、勘違いされても困る。後々の面倒は避けたい」

「ああ、そう。そうねーおモテになりますもんねー」

環は思わず、無表情な棒読みで言葉を返した。

端正な顔立ちに、表面的には温和で優しい紳士の態度。その艶冶な微笑みに勘違いしたり、惑わされたりしないのは、環を含めて数名の女友達しかない。

その中で、愛人に仕立てるとしたら環ほど最適な人間もないだろう。

今環はフリーだし、おあつらえ向きなことに、鷹藤が所有するマンションに暮らしている。管理人として住んでいるだけだが、傍から見たら愛人と思われても不思議ではない立ち位置にいるのだ。

「お父様を選んだお嬢様なら、きっと本当に良家の子女で大和撫子でしょう？ いっそ馬鹿なお芝居なんてしないで、結婚すればいいんじゃないの？ イイ年なんだし、鷹藤

グループの後継者様がいまだに独身っていうのも問題あると思うけど？」

「それこそなんの冗談だ？ 親父に世話をしてもらわなくても、俺は自分の結婚相手くらい自分で見つける。箱入りで育てられたらしい名家の令嬢と付き合うつもりもなければ、結婚する気もない」

「会ってみれば、素敵な人もかもしれないじゃない。そこまで否定することないと思うけど？」

「もう会った。会ったうえで、言っている。確かに美人で、今や絶滅危惧種になっている大和撫子かもしれない。だとしても、彼女と結婚するつもりはない。ただの大和撫子じゃあ、俺の結婚相手としては面白くないからな。だが、向こうがその気で、親父もその気だ。簡単に断れる状況じゃなくなっている。ただの恋人がいるレベルじゃ、もうどうにもならない」

「あ、そう」

鷹藤の言葉に、環の心が揺れる。

『ただの大和撫子じゃあ、俺の結婚相手としては面白くない』

—— だったら、一体どんな女だったらいというのだろうか？

何物にも執着しないこの男が結婚すること自体想像がつかないが、でも、いつかは会社や家のために、どこかのお嬢様と結婚するのだろうと思っっている。

今回のお相手は気に入らなくても、この先、第二、第三の見合いをして、その中の誰かといずれは結婚するはずだ。

カクテルを飲み干していたことを、ほんの少し後悔する。胃の奥からせり上がってきた切なさど苦い感情を誤魔化す道具がほしかった。

「すみません！」

話の途中だったが、環は通りかかったウェイターにラスティネイルを注文した。

珍しく強い酒を頼む環に、鷹藤がおやつという顔をする。だが環は構うことなく、鷹藤に次の酒をどうするか確認した。

「じゃあ、マルガリータで」

去っていくウェイターの後ろ姿を眺めて、環は自分の感情が風呂までの時間を稼ぐ。

「状況はわかった。で、愛人がいるってことになれば、向こうは素直に諦めてくれるわけ？」

「プライドが高い一族のお嬢様だ。結婚前から愛人がいる男なんて、認めるとは思えない」

「ふーん、そ。それで私は何をすればいいの？ イギリスと日本。離れて暮らしてらうえに、この三年までもに連絡すら取っていなかった私がいきなり愛人だつて言っても、向こうは納得しないんじゃない？ 名家のお嬢様が相手なら、もう身上調査くらいされ

てるんでしょ？」

「多分な。だけど都合のいいことに、お前は今も俺のマンションのあの部屋に住んでるから、いくらでも誤魔化せる」

「そんなもん？」

「そこは俺がなんとかする。ということぞ環」

「何？」

「明日から、俺はマンションに戻る。暫く一緒に暮らすぞ」

「はあ？」

再びの不意打ち宣言に、環は眩暈を覚える。

「親父の命令で、三か月ほど日本で仕事することになった。その間ホテル暮らしをしてもいいんだが、せっかくの機会だ。お前との仲を見せつけるのに丁度いい」

愛人がいるということを見せつけるのであれば、一緒に住むのは合理的なのだろう。しかし、それを今このときに言うのはどうなのだ。

最初から環が断らないのをわかっていて、この男は計画を立てたのだ。

「……わかった。もともと陽介の部屋なんだから、好きにすれば？」

東の間絶句したあと、環は諦めとともに鷹藤の宣言を受け入れる。

連絡もなしに突然マンションに帰ってこられるよりはましだ。

今、環が住んでいるのは、もともとは鷹藤が学生時代に株でもうけた金で買ったマンションだ。

別れと同時に部屋を出るつもりでいたが、イギリス赴任直前だった鷹藤が、このまま管理人としてマンションに住むように言ってきたのだ。

『環が別れたいって言うなら仕方ない。だが、俺はこれからイギリスに赴任するし、誰かに貸すにしても、信用できない人間は嫌だ。今から探す時間もないから、お前がここに管理人として住んでくれ』

そうして半ば強引に、鷹藤は環を部屋に住ませたままイギリスへ赴任していった。だから、鷹藤が帰ってくるというのなら、環は受け入れるしかない。

「環ならそう言ってくれると思っていたよ」

「よく言うわよ」

呆れを隠さないため息をついて環は隣の男を見るが、何が楽しいのか、鷹藤はにやりと笑っていた。

——この性悪!!

環が断れないと踏んでこんな話を振ってくるあたり、鷹藤の性格の悪さがわかる。しかし、そんな鷹藤を環は受け入れてしまうのだ。

自分がどうしようもなくこの男に甘い自覚はある。

話がついたところで、二杯目のカクテルが届けられた。

無言のまま、環はオールドグラスに注がれた錆び色の酒を揺らす。

ラストイネイル——錆びた釘という意味をもつこのカクテルは、環にとつて鷹藤の存在そのものだ。

いつまでも心の柔らかい部分に刺さって抜けない釘。口あたりは甘いのに、アルコール度数の高いこの酒は、環には少し刺激が強すぎる。そんなところまで鷹藤と同じだ。束の間の沈黙が二人の間に落ちた。

「……ところで、愛人の振りをするのはいいけど、私のこの先の生活の保障はあるわけ?」

「ん?」

「愛人役のせいでは、お宅のお父様に睨まれて職を失うのは、さすがに勘弁してほしいわ」

ただでさえ、環は鷹藤の父親によく思われていない。

鷹藤の傍に居ることができれば、今度は職を失うことになりかねない。

仕事で直接顔を合わせることはないとはいえ、環は鷹藤の父親に関連する企業に勤めているのだ。

鷹藤の父親がその気になれば、末端の社員の首なんてあっさりと飛ぶ。

閑職や僻地に飛ばされるくらいなら受け入れる覚悟はあるが、さすがに失職は勘弁してほしい。

だが——、ふと、これもいい機会なのかもしれないと思ひ直した。

別れてから三年。鷹藤とは一切連絡を取り合うこともなく、会うこともなかった。だが環は、鷹藤の所有するマンションで暮らし、鷹藤が残してくれた人脈の中で生きてきた。

別れてからもずっと、鷹藤のテリトリーの中で生活してきた自覚が環にはあった。

『別れたからって、いきなり消えるなよ？　いくら野良猫でも、俺のせいで今まで築いてきたものを切り捨てる必要はない。おあつらえ向きに俺はこれからイギリスに行くんだから、お前はお前で、自分が築いたものを大事にしろよ』

その言葉を残して、鷹藤はあっさりイギリスに去っていった。そうして環は、ずっとその言葉に甘えている。

実は鷹藤のイギリス行きが決まったとき、環はついてくるように言われていた。

だけど何もかもこの男に寄りかかる自分が嫌で、環は『自立したい』と彼に別れを告げたのだ。

そうして得た環の自立だったが、結局、鷹藤が残していったくれたものたちに助けられた、中途半端なものではないのが現実だ。

もし鷹藤の父親に睨まれるのであれば、いつそ今度こそ何もかも振り切って外に飛び出してしまえばいい。

どうせ、元は天涯孤独の野良猫だ。どこでも生きていける。

両親を亡くして呆然としていた頃とは違い、今の環は生きていく術をちゃんともっている。自分一人くらい生活することはできるはずだ。

しかし、環の思考は鷹藤にあっさりささげられた。

「それについては心配しなくてもいい。私情で優秀な社員を首にするような真似はさせないから、安心しろ」

「ん。わかった」

普段は人々からかって遊ぶようなどうしようもない性格をしているが、こういう約束は絶対に守る男だ。だから、環は短く頷くだけに留める。

でも、別に、鷹藤がこの約束を守れなくてもいいと思っていた。

鷹藤の不利になるようなことがあれば、いつでも姿を消すだけのこと。

大げさかもしれないが、それくらいの覚悟がなければ鷹藤の父親を敵に回すことなんてできない。

環はゆつくりと酒を呷る。むせそうになるほどの強いアルコールが喉を滑り落ち、胃がカツとなった。

先ほどとは比べものにならない酩酊感めいていかんに押されるように、環は小さな覚悟を決める。三か月後——自分は、家も職も失っているかもしれない。

でも、鷹藤が家賃を受け取ってくれなかったせいで、この三年間で貯金もそこそこできた。

暫くは生活に困ることもないだろう。

くらりと目がまわり、環は臉まぶたを閉じる。今日は飲み過ぎたと思う。

でも、酒の力でも借りなければやってられないのだから仕方ない。

トラブルに巻き込まれて、鷹藤が環を頼ってくれたのは嬉しい。

鷹藤にもらった返しきれないほどの恩を、少しでも返せる機会をもらえたことをありがたいと思っている。

でも、何故か今、環はもう一度、この男に失恋したような理不尽な気分を味わっていた。

とつくの昔に別れたはずなのに、それすらもなかったことのように接してくる男。彼にとって、環の存在はその程度なのだと思いきらされた気分だ。

——あと何度。あと何度、私はこんな気持ちを味わうのだろうか？

酔った頭でそんな馬鹿なことを考える。

——飲み過ぎた。今日はもう帰ろう。

環は、アルコールに火照ほてった吐息をひっそりと吐き出して、臉まぶたを開く。

まるで夜の闇そのものの深い色を宿した男の眼差しが、環を見下ろしていた。

——さっさと結婚しちゃえ！ バーカ。

言葉にできない想いを視線に乗せて、環はひっそりと笑う。

「環？」

呼びかけと同時に指が伸びてくる。頬に再び、鷹藤の手が触れた。

酔いのせいで理性がもろくなっているのか、環はその手のひらに頬を押しつける。

——どうも今日の自分は、悲劇のヒロインになりきっているらしい。

鷹藤との再会が、それだけ環の心を揺らしたということなのかもしれない。

だが、少し冷静になったのか、急に自分の浸りひたきった感情がアホらしくなってきた。

——この男相手に悲劇のヒロインごっこをしたところで仕方ない。時間の無駄だ。

頬に触れる男の手のひらは、アルコールに火照ほてった肌には冷たく感じる。まるで、二人の心の温度差のようだ。だが、その冷たさが気持ちいい。

——早く離れて、さっさと帰ろう。そして、陽介の部屋の掃除をして、ベッドのシーツを掛けて。やることはたくさんあるんだから。

帰ってからしなければならぬことを頭に思い描いて、自分の心に蓋ふたをする。

しかし、酔いがまわった身体がいうことを聞かない。

「環？」

「何？」

「誘ってる？」

鷹藤のふざけた言葉に、少し酔いが醒めた気がする。

「寝言は寝てから言つて」

強気な態度で言つたのに、言葉とは裏腹に、環の頬はいまだ男の手のひらに預けたままになっている。

誘っているつもりなんてない。

でも、果たして本当にそうだろうか？

絡んだ視線の先。眇められた男の目に映る自分はまるで見知らぬ女のようにで……。ひどく潤んだ瞳で、目の前の男を見つめ返している。

こんな顔の女は知らない。

環は顔を伏せて、そんな自分から視線を逸らす。

そうして、自嘲とともに思う。

——こんなつたない誘惑で落ちてくれるほど単純な男だったら、話をもっと簡単だったはず。

感傷的な想いに囚われそうになって、環はふっと小さく息をついた。

——何、馬鹿なことを考えてるんだか。今日の自分は本当に酔っているらしい。

「酔ったから帰る。悪いんだけどタクシー呼んでくれる？」

なんとか気力だけでそう言つて、鞆を引き寄せる振りで不自然にならないように鷹藤の手のひらからそつと顔を外した。

「帰るのか？」

「帰る。さすがに疲れたし酔った。明日は二日酔いかもね」

なんにもなかったような顔をして、環は鞆から財布を取り出そうとした。だが、「野良猫に金を出してもらうほど落ちぶれてない」と断られる。

「あ、そうですか。さすがお金持ち。ごちそうさま」

軽い口調を心がけて、環は席から立ち上がった。だが、酔いは思っていた以上にまわっていたらしい。立った瞬間に、足元がふらついた。

「おっと」

一緒に立ち上がったいた鷹藤が、さりげない動作で、ふらついた環の腰を支えてくれた。

「大丈夫か？ 本当に酔っているみたいだな」

広い男の胸に受け止められながら耳元に落とされた囁きに、鼓動が再び跳ね上がる。

「ごめん、ありがとう」

いい年をして、自分の酒量も把握できていないことに情けなくなる。鷹藤にはこれ以上情けないところなんて、欠片も見せたくない。環は一度眼を閉じて、深くゆっくりと呼吸した。そして、眼を開く。まだ少し眩暈は残っているが、慎重に歩けば無様に転ぶこともないだろう。

「もう大丈夫。離してくれる？」

大丈夫だという合図を込めて、環は腰に回された鷹藤の手を軽く叩いて、身を離そうとした。

しかし、逆に引き寄せられる。

「よ、陽介？」

先ほどよりも増した密着度に、声の上擦った。

「まだふらついているんだから、無理しないで掴まってる。ついでに、ちよつと俺の部屋で休んでいけ」

「そこまでしてくれなくても大丈夫よ」

「いいから言うことを聞け。そんな顔でふらふらされるとこつちがたまらない」  
 なんだかひどく怒ったような声で言われて、環は首を傾げる。

—— 一体何をそんなに不機嫌になっているの？

珍しく感情を露わにする男の態度に疑問をもつが、酔いのまわる頭ではそれ以上考え

られなかった。

正直、動くのも億劫なほどだったから、鷹藤の申し出はありがたい。

半ば引きずられるように、環は鷹藤が泊まっているスイートルームに連れていかれた。部屋に入ると同時に手首を強く引つ張られ、バランスを崩しそうになる。

「陽介!？」

酔いとろりと緩んでいた意識が覚醒し、掴まれた手首が疼く。

普段意識することもない血脈が確かにそこにあることを、環は感じた。

次の瞬間、ふらつく腰を抱き寄せられ、思わずのけ反る。その視線の先、吐息の触れる距離に、鷹藤の真っ黒い瞳が迫る。

気付けば、環は鷹藤の腕の中に囚われていた。

「な、何を……」

状況が理解できずに問う環は、ひどく混乱していた。

まるで夜の闇さながらの深く黒い瞳に見下ろされて、呼吸が止まりそうになる。射竦めるような強い眼差しに、絡んだ視線が離れない。

「冗談……やめ……て……」

自分でも情けなくなるくらいに、震えて掠れた声が零れた。

もがくような弱い動きで鷹藤の腕から逃れようとするが、酔った身体は思う通りには



動かない。

逆に、ますます鷹藤に引き寄せられた。

何故こんなことをするのか理解できずに、環はゆるゆると首を振る。

「お前ね、環。いくらなんでも警戒心がなさすぎるだろ」

「は、な……して」

唇に鷹藤の吐息が触れて、環の戦慄きはひどくなる。

「まあ、俺に警戒心をもたないのはいいことだけど」

目を眇めて、何故か不機嫌な様子を見せる男が冷たく嗤う。

背中から首筋をすつと撫で上げてきた大きな手のひらが、環の髪を鷲掴みにした。

「……っ！ 陽介……」

髪をまとめていたかんざしが強引に引き抜かれて、乱れた髪が肩先に落ちる。

カツンと軽い音が聞こえた。

お気に入りのかんざしの行方を追って視線を彷徨わせた環が気に入らないというよう

に、鷹藤が指に髪を絡ませて引っ張る。

その痛みに、環は顔を擧めた。

上向きに顔を固定され、抗う間もなく乱暴な所作で唇を奪われる。

「……んっ！ んん!!」

重ねられた唇から逃げようと首を振れば、環を拘束する腕はさらに強くなった。深くなった抱擁に、目が眩む。

唇に滑り込んできた舌が、我が物顔で環の口の中を蹂躪する。

背筋を駆け上がってきた疼きに堪え切れなくて思わず首を反らすと、唇がより深く重

なった。

濡れた舌が柔らかに淫猥な動きで、環の口腔内を舐めあげる。

「ん……やあ……!!」

吐息ごと奪われるような口づけに、息苦しさを覚える。零れた声は、ひどく甘い女の

声をしていた。

せめてもの抵抗に男の肩を叩くが、それは頼りなく、力ないものだった。

ねっとりとした口づけに、身体の奥にアルコールの火照りとは別の熱が灯される。

そうして、環は思い知る。

自分が、この男の肌にはひどく飢えていることに――

久しぶりに触れ合った肌はあまりに環の身体に馴染んでいて、今、離れてしまえば引

き離される痛みにおかしくなってしまう気がした。

心がどうしようもなく軋んで、悲鳴を上げる。

こんな痛みを環に与えるのは鷹藤だ。けれど、この痛みから解放してくれるのも鷹藤

しかない。その矛盾に、環の混乱はますますひどくなる。

鷹藤の口づけに翻弄されて、身体から力が抜けていく。崩れ落ちていきそうな身体が怖くて、環は鷹藤の背に腕を回して縄つた。

大きな手のひらが環の背中から腰にかけて這いまわり、柔らかなラインを描く尻を鷲掴む。いつも飄々として掴みどころがない男は、こんなときばかりはその印象を裏切り、執拗に環の身体を蕩かせる。

長く続いた口づけが解かれた。

離れていく唇を追うように、環は閉じていた瞼を開いた。

見上げた男の瞳に、環は自分と同じ飢えを見つけ、なんだか不思議な気持ちになる。

濡れた唇を、鷹藤の指が拭う。薄い皮膚の上を辿られて、震える吐息が零れた。

抑えきれない情動に、環は唇を辿る鷹藤の親指を口に咥える。

驚きに鷹藤の目が一瞬だけ見開かれるが、すぐに険しい表情にとって代わった。

「少しは自覚しろ」

何を？ とは問わなかった。問うたところで、鷹藤は答えないことを環は知っている。

代わりに、最後の悪あがきで呟く。

「……愛人の振りはするって言ったけど!! こんなことまでするなんて聞いてない」

「俺は最初に言ったはずだが？」

からかう素振りで覗き込んでくる男の眼差しはひどく獷猛で、環は早々に白旗をあげたくなった。さらりと笑っているように見せて、環を抱く男の腕は抵抗を許さない力で、彼女をとらえている。

『環。お前、俺の愛人になれ』

確かに愛人になれとは言っていた。愛人についても、セックスの相手だと堂々とろくでもない説明をしてくれていた。

「最低男」

湧き上がる苦い感情のまま吐き捨て、環は男の眼差しから逃れるように顔を背ける。

「褒め言葉だ」

環の罵りが応えた様子はない。むしろ笑って、環の首筋を甘噛みする男のろくでもなさげ腹立たしい。

だが、何よりも腹立たしいのは、この状況に流されそうになっている自分だ。

今こんな風に抱き合っている事実があっても、鷹藤が環を求めているとはどうしても思えない。だというのに、環はこの男の肌を求める衝動を抑えられなかった。

この男に対するどうしようもない飢えが環の理性を彼方へと吹き飛ばす。

「きゃああ!」

不意に視界がまわった。鷹藤の腕に抱え上げられている。

## 立ち読みサンプル はここまで